
First love ~恋かもしれない~

桜桃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

First love ～恋かもしれない～

【ΖΠード】

N7418M

【作者名】

桜桃

【あらすじ】

First love . . .

初めての恋。

初恋。

ある女の子の甘酸っぱい思い出 . . .

この話は、名探偵コナン　自作小説
にも掲載されています。

自己紹介

「神田菜乃です。

特技はフルート。部活は吹奏楽部に入らうと思つてしています。
一年間。よろしくお願ひします。」

私は清水咲。

帝丹中学の新入生。

今は無事、入学式が終わり、自己紹介の時間。
そろそろ私の番。

「工藤新一です。

趣味は読書、特技はリフティング。

部活はサッカー部に入ろうと思つています。

よろしくお願ひします。」

きちつとした口調にりりしい顔立ち。

この人、本当に私と同一年！？

ドクン。

ドクン。

つと鼓動がなる。

もしかして・・・

「次！」

「は、はい！」

いけない。

次は私だつたんだ・・・
はずかしい。

工藤・・・新一君・・・

私のこと、見てくれるかな？知つて・・・くれるかな？

「清水咲です。

趣味、特技は絵を書くことです。部活は美術部に入りましたと思いま
す。

青森から来て、知り合いは居ません。仲良くしてくれるとうれし
いです。

よろしくお願いします。」

席へ戻る途中、

私は工藤君をちら見した。

頬杖をついて、下を向いていていた。
まつすぐで綺麗な瞳が目に映る。
一瞬で真っ赤になつたのがわかつた。

右斜め前の工藤君の後ろ姿。
たつた一目見ただけなのに。
一目ぼれ・・・なのかな？

1人、また1人と自己紹介が終わる。

「毛利蘭です。

趣味、特技は家事、空手です。

部活は空手部に入りましたと思ってます。」

「つわづわー。」

「まじかよ・・・」

可愛い子が空手部!-?

皆は口々に声を出し合いつ。

「ほら、蘭。愛しい田那をまがいるとこアピールもしなきやー。」

「田那なんかいないわよー。」

「やついや、工藤君も奥さんがいるつっちゃんと言わなかつたわね。

「

「俺は奥さんなんていった覚えはねえぞ。」

だ、旦那？

それに奥さんって！？

ぐ

誰かのおなかがなつた。

「わりいな！俺だ！！」

「あ、荒川・・・」

「朝食抜いてきたもんで・・・」

みんなは大爆笑

そのとおり、

「朝食・・・」

毛利さんがぼそっと漏らす。

工藤君の背中がピーンと伸びたがわかった。

人物紹介（後書き）

園子「なんで工藤君、奥さんがいますって言わなかつたのよー。」

新一「言つわけねえだろー！」

園子「蘭だつて言わないし・・・」

蘭 「言わないわよ！第一、旦那じゃないし。」

桜桃：はあ。

園子が工藤君と言つのにはなれません・・・
高校生にすればよかつたかも・・・・
まあ、いいや！

次回もよろしくおねがいします。

朝食

「蘭?どうしたの??」

毛利さんは下を向いている。

「朝食・・・」

毛利さんが2回目の『朝食』を言った。

そろ~りそろ~り。

なぜかしら、工藤君が逃げよつとしている。

「新一一」

「はー。」

誰かが怒鳴った。

工藤君を呼び捨て・・・

誰? いつたい・・・誰なの?

「こつからおじ様とおば様、スペインに行っているの?」

「あ、昨日の晩から・・・」

「く~。どうで、おこしそうな朝食のにおいがないと困ったわ。」

びくん！

工藤君の肩が跳ね上がる。

しかも、汗がかなりと流れ···

「や、それがどうかしたか？」

「そんなの、聞かなくともわかるんじゃない？」

「ああ、今日はちやんと、朝^ハはん食べたから。」

「本當^{ハシマ}に。」

毛利さんは半田を開けている。

疑つてこぬようだ。

「まあ、いいわ。今日新一の家に行けばすべてわかる」とだして、
「つれだつたときは、わかつてゐるわよな?」

「す、すこません・・・」

「なにをあやまつてゐるの?」

あくまでも笑顔・・・

「えりと・・・やの・・・・」

「まつわつしなむことよ。」

「だから、あの・・・・」

「だから、なによ。」

「朝食は抜いてきましたーー。」

工藤君の声が教室中に響きわたる。

シーン

「抜いてきたあーー!?」

「だから、あやまつただろーー。」

「あやまつですむ問題！？」

「しょうがねえだろ？新作の推理小説が・・・」

「口を開けば、推理、推理、推理・・・あんたの頭には推理しないの！？」

だから、おおばか推理之介って言われるのよー。」

「それ言つてゐるお前だけだろ！？」

「なによ！人が折角心配してゐるのに！！」

「誰も頼んでねえよー。」

ピキッ

音がした。

「あちやー、工藤君、いらっしゃったわね。」

鈴木さんがぼそっと囁つた。

毛利さんの雷が落ちるまで、

あと

5
秒
·
·
·
·

咲 「工藤君ってどんな子なんだろ。」

桜桃 「好きになつたら、後悔するよ？」

咲 「え？」

新一と蘭の仲を認めさせる

ようとするには、説得力が必要。

でも、哀がいない今。

説得力がある人がいないではないか！

「あ、あのぉ……蘭さん？」

「ふざけんじやなこわよー!!!!」
頼んでない? そうね、『めんね。私が勝手にやつた』とだし…」

「え?」

「…………わよ…………」

「自分で好きにすれば！？知らないんだからー栄養不足で倒れても
！！」

毛利さんは怒つて席に着いた。

キーングーンカーンゴーン・・・

「・・・さゆ、休憩に入つてください。
3時間田はオリエンテーションです。」

「悪かつた！謝る！つい、出でまつたんだ！本気じゃねえから！」

「・・・つい、本音が。じゃないの？」

「な、なあ、夕食・・・」

「自分で作れば。」

「苦手なの知つてゐるだろ?」

「知らないわよ。ゼーんぜん。わかつたら向ひにひこつてよね。」

毛利さんの機嫌はまだ、直らない。

「あーあ、工藤君。蘭の機嫌はそつそつ直らないわよ。」

「・・・はー。」

「なあ、お前の子とやけに仲がいいな。」

גָּדוֹלָה
וְעַמִּיקָה

「工藤と毛利は昔からそうなんだよな。」

「もしかして、恋人とか？」

「ちがうちがう。
ん、むしろ夫婦？」

本人は幼馴染の『つもり』みてえだけど！」

卷之三

『新約全書』

工藤君までご機嫌ななめ。

せつかくの初恋なのに。

大事に大事に育てたいのに

諦めなくちゃいけないの？

蘭 「新一があやまつてくるまで知らない！」

桜桃 「あーあ。」

蘭 「一生懸命作った料理。おいしそうに言ってくれて嬉しかったのに、新一はあんなこと思ってたなんてショックで・・・」

桜桃 「たしかにねえ・・・早く仲直りしてよ？」

蘭 「あいつは私と仲直りなんてしたくないわよ！」

桜桃 「相当怒ってるね。」りゅあーあ。

「じゃあな、工藤！」

「ああ。」

「またね！蘭！」「

「うん。明日ね！」

一言も喋ってはいないのだが、

しつかり並んでかかる2人。2人の距離はおよそ、5cm。

「ねえ、まつちー。2人つて喧嘩してたんじゃない？」

まつちーは工藤君と毛利さんは小学校が一緒。

「え？ ああ、2人つてばむかしつからそうなのよ。」

「むかしつから？」

「そつそつ、俺なんか、腰抜かし」とあるぜ？」

「」「腰抜かす！？」

「そつそつ、海田君つてば、2人が1時間目から喧嘩しててね、下校時間になつたら、2人とも一緒に帰るのよ。だから、聞いたの。喧嘩してなかつた？ つてしたら、してるつて言うのよ？」

「はー？」

「意味わからないでしょ？ そしたら、蘭つてば、帰る方向が一緒だから。
つていうじ。」

「そつそつ、普通、帰る方向が一緒だからつて一緒にかえらねえよ
な。」

「それでこいつ、腰抜かしたんだよな。」

「まあ、2人の歴史はこれからなんじゃない？」

「園子の髪のとおりな。どんどん冷やかしてやりますよー。」

「おーー。

ひと盛り上がる。

「でも、さすがに藤君、密かに狙つてたのになあ。」

「麻由美～。でも、確かに藤君、かつてこしねえ～。」

「かつてこじけど、毛利のもんだつて。俺のしつかない？」

「だあれがあんたなんか選ぶのよー。」

「俺はお前に言ってねえよー。誰がデブに頼むかよー。ナーナマド落ちぶ
れて

ねえよー。」

「悪かったわねー。デブブスでーー。」

笑い半分怒り半分の話が私の前で繰り広げられた。

麻由ちゃん、工藤君を狙つてたんだ・・・

ジエリーシー

「咲～。お醤油買つてきてくれない？」

「はあ～い。」

とくに何もすることはなかつたが、なんだかやる気が起きない私の体はずつしりと重たく、だが、お母さんの頼みごとを断りはしなかつた。

～スーパー～

「えつと、お醤油、お醤油 . . .

あつた！あとは、バターと . . .」

つたぐ、お母さんひたらお醤油つて言つたくせに違つものまで買わせるんだからー

「あれ？清水さん？」

「も、毛利さん！？」

「清水さんもお買い物？」

「あ、うん・・・」

「そっか。うちの晩御飯ね、カレーとかぼちゃサラダ。ハンバーグと野菜あえなの。」

「はー？」

ちゅ、ちゅつとまつて・・・・・

主食が2つもはつていたよ!つな・・・・・

「あ、ごめんな。カレーはお父さんので、ハンバーグは新一のなの。」

「へ、へえ・・・・」

工藤君の・・・・晚御飯・・・・

「おつかいがあ・・・・うかも、お母さんに言われてね。」

「お母さんか・・・いいね。」

「え?」

「あ、清水さんは小学校が違つたね。
お母さんね、私が小さい頃、出て行つたの。」

「うん・・・」

「でもね、ちゃんと会つてゐるのよ?
いわゆる、別居。」

お父さんとお母さんも意地つ張りだからなかなか
仲直りできなくて・・・
たまに、ばつたり作戦とかするんだけど・・・」

「ばつたり作戦?」

「うん。偶然をよそおつて2人つきりにするの。」

・・・なんて健気なこなんだろ・・・
いまだき、こんな中学生がいる!・?
絶対いないわ!

「そりなんだ・・・でも、料理とか大丈夫なの?」

「ああ、うん。私のお父さんとお母さんと新一のお母さんは幼馴染
だったの。

でね、お母さんが出て行つたと知つた新一のお母さんは私に
料理を伝授してくれたのよ。」

ズキッ・・・・

じ、じゃあ、毛利さんの料理は工藤君にとつて、
”おふくろの味”
的なかんじ？

どうりで工藤君が毛利さんの料理を食べるわけだ。
じやなわや、こいつ幼馴染だからって・・・

ああ、どうしよう。

私、だんだんいやな奴になつてゐる。
こんな優しい毛利さん相手に
醜いジエラシーを抱いてる。

恋したうじこなにも変わるの？

私は、

私は、
私自身が怖い・
・
・

ジエラシー（後書き）

桜桃「恋したら変わっちゃうなんて・・・」

友C「そんなことないって。」

桜桃「いや、あんたげんに好きな人で来て変わっちゃったじゃん。」

友C「そうだっけえ？」

桜桃「こ、こいつ・・・」

友C「こいつって言われたあー！..ねえー！B - - - .」

友B「なんだ？」

友C「こいつっていわれたあー！」

友B「ふつ。お前は所詮、その程度の女ってことだ。」

友C「なにそれ！」

友B「なんだよー！-！」

桜桃「終わりそうにならってか、これ以上ひどく

なりそうなので、強制終了！-！」

次回もよろしくお願ひします！」

友B C「勝手に終わらせんなよー！」

四四四・・・

私は、日に日にいやな奴になつてゐる。
絶対・・・
すべて、それが毛利さんのせい。
つと思つてしまつほど。

「キヤーー！工藤君ーー！」

サッカーをしている工藤君。

さつきなんか、休憩中に毛利さんから水筒、タオルを貰つていた。
お昼のお弁当も毛利さんお手製なんだろう。
とってもおいしそうだった。

周りの女子は、怒りに燃えている人もいれば、
ほほえましく見ている人もいた。

多分、ほほえましく見ている人達は、同じ、小学校なのだろう。

「工藤ー、ゴール決めろーーー！」

「かっこよくなーー！」

生徒の応援の中。

バンツ

工藤君は次々にシュートを決める。

「ナニヤー」

「二二一」

歓声をあげる人や、友達と抱き合い、喜び合つもの。
たくさんいた。

「相手ボールのままだわ・・・」

「工藤、なにせつてんだよ・・・・」

皆くやしい表情。

「あっちゃん。完全に遊んでるわね。」

「うん。むかしからあせだからね。」

後ろを見ると、毛利さんと鈴木さんがいた。

「遊んでるって？」

「ああ。蘭、言つてやんなよ！」

真由ちゃんが聞いていた。

「新一の顔見たら、わかつたことなんだけど、
もつと上手くできねえのかよ。とか考てるみたいで、
飽きたらさつさと奪つてシュー。ト。
みたいなのをしてんのよ。かつきからね。」

「工藤君が？」

「うん。」

つとそのとき、

なんかの物体がこちらへときた。

サ、サッカーボール！？！？！？！？！？

思わず避ける。

(あ、当たる……)

バンッ!!

(いつた・・・くない!?)

「蘭!/?蘭!-/」

慌てて私は後ろを見た。

ボールは下に転がり、顔を押さえている毛利さん。

「だ、大丈夫。心配しないで。」

涙目の毛利さん。

ふふつ。

いい氣味。

工藤君を独り占めするから・・・

また。

まだ・・・

私、本当に嫌な奴になってる・・・

どうしようつ・・・

「蘭！」

工藤君が駆けてきた。

「コントロール誤ったの、相手チームの中原つて人だつて！」

「工藤君に取られまいと、むきになつたからよ。」

ひそひそと話しあじめる。

「わ、悪い！ 大丈夫か！？」

多分、中原つてひと。

がこちらへときた。

「大丈夫なわけねえだろ。」

「え？」

「蘭、立てるか？ 園子、保健室。」

「う、うん。」

毛利さんは鈴木さんに連れられて、グランドを出た。

「おい。」

「え？」

「蘭の顔に傷一つあつたら、お前の命はないと思え。
俺がぶつ殺しに行くからな。」

今までに聞いたことのない低い声。

ぞくつとするほど冷たい目。

多分、同じ小学校の人たちもみたこともないのだろう、

冷や汗をかいているひとがほとんどであった。

勿論、

教師毛 · · · ·

四三四・・・(後書き)

園子 「あつちやー！新一君、こんなこと
言つてたんだ・・・聞きたかった…！」

桜桃 「あはは。つて、高校生の園子…？」

園子 「なによ、悪いの？」

桜桃 「い、いや、全然！」

園子 「あ、そう。それにしても、新一くんの言葉一
聞きたかった！！本当に！」

桜桃 「いいじやん、今聞けたんだし。」

園子 「生じやなきやこやよ…」

桜桃 「あ、ああ・・・やう。」

「なるまえに。」

自分で自分がいやな奴になつてゐることがわかる。

毛利さんにジエラシーを抱いているのもわかっている。

毛利さんがもつと嫌な人なら、あたりようがあるけど、

そんなのひとつもない人だけに、私はどんどん悪態化している。

* * 保健室 * *

「も、毛利さん？」

「あ、清水さん。きててくれたんだ。ごめんね、心配かけて。」

「う、うう。それより、大丈夫なの？顔。」

「大丈夫よーほら、このとおり。」

きれいな顔を見させてくれた。

「なあに言つてんのよー大丈夫なひ、」の傷はなに?」

鈴木さんが指を出した場所には真っ赤にはれた毛利さんの顔があつた。

「そ、園子!」

「なによ、上藤君には言わねえよ。」

「だ、だめーー心配かけやつ・・・・・

「こやあよ。私が上藤君に怒られやがつもの。」

「おねがい・・・・

「おねがい。」と言つた毛利さんは涙目だつた。
鈴木さんはわかつたとこつたが、『もそつと
どうせ、上藤君にはばれると想つたどつと言つてこた。

「清水さんも」めぐねーーこれがこの怪我で心配をさせて。

いや、これがこらへと並ぶのこらへるこの怪我。

「やんなのこないよ。病院いつたほつがいいんじやない？」

「あつがとい。 もわしいんだね。」

毛利さんは微笑んで言った。

そんな、私はやせしくなんかない。

だって、毛利さんが怪我をして、喜んじゃったんだよ？

一瞬の氣のゆるみかもしれないけど、それとそれは

本音だと思ひ。

そんな私をややしこと感ひの?

毛利さんのほうが優しこよ。

「私も病院行いひと思つてたの。
心配してくれて、どうもありがとう。
うれしいよ。」

お願ひだから・・・

お願ひだから、そんな優しい、天使のよつた笑顔で私を見ないで。

今の私はすっごくみにくいから。

ジョラシーで、欲でいつぱいだから。

今の私には貴方の笑顔は苦痛になる。

こんなこと言ひちゃ悪いけど、

胸がしめつけられるよつこ・・・・・痛い。

きつと、私。

今もまだと毛利さんを傷つけちゃう。

ひどいこと、言ひちゃうと思つ。

私の醜い思いをなんも悪くない毛利さんにあたっちゃう。

いつなる前に、いつなる前に、

元の私に戻らなきや。

「咲！聞いて！」

サッカーの試合を再度見ようと、グランドに行くと、

真由ちゃんが私に気付き、かけよってきた。

「どうしたの？」

「一藤君、相手チームに一票もこれずに、せんせんシター
もねぢやつて、あつとこつ闇に、試合終了ー。」

「はー！？」

「先輩も、工藤君のパスを待つてたんだけど、全部工藤君がゴール。後半も5分足らずでおわちゃつたのよ。」

גַּעֲמָנִים

「本当よ！蘭ちゃんパワー最強だわ…………すうじゅぎる…………」

• • • •

工藤君は保健室へ行こうとしているのか、

学校へと向かっていた。

私は、工藤君の事を思って出し、

真由みちゃんに話題ついで、走り寄った。

「へ、工藤君ー。」

「清水？なんか用？」

「え、えっとね、毛利さんに怒られそうだな
工藤君に一つ、話しておくな。」

「？」

「毛利さんの顔の怪我、ひどこみたい。
私、わざわざ行ったんだけど、病院行ったほうがいいよ。」

「本当か？それ。」

「本當よ。これでも、医者の娘でこうこうと
教えてもらひてゐるの。」

「・・・サンキュー。」

「えりこたしました。」

私に笑顔を向けた。

だが、走っていたときの上藤君はすでに、

殺意が芽生えていた。

* * * *

「おい。」

「や、君は・・・

「お前だよな。蘭にボールぶつけたの。」

「あ、そうそう。大丈夫だった?」

今まで忘れていたかのような口調をし、

心配するようなしぐれをする。

「大丈夫だった？ 傷、 できてたよ。」

「え、？」

「言つたよな、 傷一つできてたら、 お前をぶつ殺しに行くつて。」

「じょ、 「冗談だろ？」

「冗談に見えるか？」

「・・・」

「見えるか？」

「あ、 傷一つくらい、 いいじゃないか。
どうせ、 たいした怪我じゃないって。
君も心配性だな・・・ 怪我くらいで、 死なねえって！」

「ふざけんじゃねええ！ー！」

胸を掴む。

「やめて…………！」

殴りかかろうとしていた工藤君に毛利さんが止める。

なぜ、毛利さんがいるのかといつと、

私は、危険を感じ、毛利さんに話して、

鈴木さんが、きつといじだらうと、教えてくれて、来たところ、

工藤君は他校の男子に殴りかかるとしていた。

「う、蘭！？」

「やめて！ダメだよ、新一。」

「私なら大丈夫だから。殴っちゃダメだよ。」

「・・・」

「どんなに、相手が悪くても、どんな事情があるひとも、殴つたほうが悪くなるんだよ。」

優しく、優しく言う毛利さん。

「ね、落ち着いてよ。新一。」

「・・・わかった。だが、お前ら、次はねえからな。」

「は、はい！」

「くすり。」

毛利さんがなぜか、笑った。

それにも、

わざわざまで『』い剣幕で、殺氣丸出しだったのに、

毛利さんの言葉で元通りになるなんて、

毛利さんの偉大さはすごいと、私は思った。

偉大き（後書き）

桜桃 「どうして笑つたの？」

蘭 「だつて、なんだかんだ言つて、
新一はお人よしだから、許しゃうんだろうなつて思つて。

桜桃 「蘭にお人よしと言われる新一つて・・・」

蘭 「でも、どうして新一が怒つたんだろう。」

桜桃 「は！？」

蘭 「あ、わかつた！

私の間抜顔が見れないからね！
そうよ、きっと・・いや、絶対そうよ！-!
なるほどね、だから新一は怒つた。うん、しつくづくるわ。

桜桃 「いや、違うだろ。」

永遠の憧れ。&その後。

本当に、すごいな。

工藤君。

告白 . . . じよひか、迷つている。

でも、今、しなきや後悔するし、多分、毛利さんに対しても

ひどくなる一方だろ？。

でも . . . あれ？？？

* * * * *

「工藤君、私、あなたが好きでした。」

「気持ちはありがてえけど . . . 」

「知ってる。毛利さんがすきなんだよね。」

「な……」

「私も毛利さんが好き。

なんかね、工藤君をどうして好きになつたんだろ?って思ったの。そしたらさ、毛利さんを一途に思う工藤君が好きになつてた……つていうか、毛利さんを好きじやない工藤君は工藤君じやないつて思った。」

「・・・」

「たつた一人の男をここまで魅力的にする女の子って、すごいよね。

工藤君、もつともつと魅力的になるとももつよ。毛利さんパワーでね!」

「・・・清水・・・」

「だからさ、もし、毛利さんになんかしたら、私、取っちゃうから。」

「・・・また強敵が増えたよ・・・」

「鈴木さんという人もいるしね?」

「はあ・・・」

前にいる工藤君は、今まで見たことのない一面で、

本当に毛利さんを好きなんだなって思い知られた。

工藤君を魅力的にしたのはまぎれもなく、毛利さん。

私にとって、毛利さんは

永遠の憧れ。

一生変わらないであらわ。

* * * * *

高校3年

もー！ー！ー！

お母さんつたら、また、お醤油だつて言つたのに、
違うものまで買わせるーーー！

私は、あの後急激に毛利さんと仲良くなり、
「蘭」「咲」と呼び合つ仲にまでなつた。

高校に入学してからは、一度も連絡をとっていない。
しかし、工藤君が名探偵だなんて、笑っちゃう。

そつこえぱ、ijiで毛利さんがあつたんだっけ。
醤油を手に持ち、あの時の風景が一瞬頭に過ぎぬ。

ふと、後の方から声がした。

「新一、今日は暑いから冷やし中華でいい？」

「ああ。お前の作ったもんならなんでもいいし。」

「なにそれ～～」

工藤君と蘭！――

私は、久しぶりの友人に会うため、
心を弾ませて、軽く走る。

びんつ――

「あ、すこません・・・・」

「いえ、じつは・・・・・・

「この出会いが恋に発展するとは、誰が予想していただろう。

工藤君と蘭が私に気付いたのは、それから、3秒あの出来事であった。

永遠の憧れ。&その後。（後書き）

咲ちゃん、最終的にはハッピーエンドですよね？？？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7418m/>

First love ~恋かもしれない~

2011年10月7日03時44分発行